

バージニア大学での研究生活

University of Virginia
School of Medicine Division of Nephrology

桑原 周平

(千葉大学大学院医学薬学府)

私は2021年3月に千葉大学薬学研究院にてPh.D.を取得後、翌月4月から米国バージニア州シャーロットツビルのバージニア大学でポスドク生活をスタートしました。シャーロットツビルは日本と同様に四季があり、一年を通して大変過ごしやすい地域です。自然が豊かで治安が良いこともあり、現在に至るまで多くの日本人研究者の方々がこの街に留学に訪れ、様々な分野でご活躍されています。また、バージニア大学はアメリカ建国の父、トーマス・ジェファソンによって創立された歴史ある大学であるとともに、世界遺産に登録されているキャンパスは非常に美しく、連日たくさんの学生や観光客で賑わっています。分野を問わず学内の研究者間の交流を深める機会も定期的に設けられており、まさに研究にうってつけの環境であると感じています。

さて、私が留学を決めた経緯ですが、前所属先の千葉大学薬学部の生化学研究室で、博士課程修了後に国内企業に就職するか海外でポスドクをするか迷っていた時かけられた恩師の伊藤素行教授の言葉がきっかけでした。「一度きりの人生、色々な挑戦をした方が楽しいでしょ、思い切って海外に行ってみたら？」と言っていたことは今でも鮮明に覚えています。伊藤研では脳科学領域の研究を行っていましたが、以前から興味があった腎臓学を専門とする海外の研究室を探すことに決めました。そして幸いにも、腎臓領域研究の世界的権威であるMark D. Okusa教授に受け入れ許可をいただき、今回の留学が実現しました。

現所属先のOkusaラボは腎臓領域における免疫研究に特化しており、現在私は“迷走神経刺激によるコリン作動性抗炎症経路の活性化がどのようなメカニズムで腎臓を炎症から保護するのか”を解明するべく日々実験に励んでいます。2022年6月現在Okusaラボにはポスドク3名を含め計7名の研究員が在籍しています。少人数体制のためそれぞれが互いの研究テーマをよく把握しており、いつでも同僚と質の高いディスカッションをすることができます。メンバーの国籍もアメリカ、中国、ネパール、スロバキアと多様なので、日本とは異なる文化や研究スタイルを肌で感じ、自身の視野を広げることができる喜びを日々感じています。過去に日本人研究者を受け入れた実績もあり、私の研究テーマの前任者にあたる田中真司先生（東京大学）と井上剛先生（長崎大学）には今も大変お世話になっております。また、メンターのOkusa教授は臨床医でありながら研究にも熱心に取り組むパワフルな方で、研究者としても人としても尊敬しています。

二年目を迎えた私の留学生活はもうしばらく続きますが、今後もこの恵まれた環境で研究ができることに感謝しながら、多くのことを学び研究者としてさらなる成長を遂げたいと思います。最後になりますが、この度の留学に際して多大なるご支援を賜りました上原記念生命科学財団の皆さまに厚く御礼申し上げます。



バージニア大学キャンパス内のシンボル、ロタンダ（2021年5月撮影）